

『嵐が丘』の起源

— 新・旧〈伝説〉をめぐって*

廣 野 由美子

『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)の物語はどこから生じてきたのだろうか？ ロックウッドから最初にヒースクリフの経歴について尋ねられたとき、ネリーは、それが「カッコウ鳥の物語」(第1巻第4章)であると言で要約する。カッコウ、すなわち他の巣を横取りする習性をもつ鳥に譬えられた余所者ヒースクリフが、アーンショー、リントン両家を乗っ取ること。これが、『嵐が丘』の物語の中核をなし、作品のオリジナリティを形成する不可欠の要素であることは、たしかだろう。では、エミリ・ブロンテ(*Emily Brontë*)は、このストーリーをどのようにして着想したのだろうか？ もちろん、エミリ自身の詩作品や、彼女が読んだ他作家の作品からの影響という要素も、見逃せない¹。しかし、本稿では主として、作家が生きた現実世界のなかにインスピレー

* 本稿は、日本ブロンテ協会関西支部 2014 年夏季大会(2014 年 7 月 5 日、関西大学)において行った講演に、加筆・修正を施したものである。

1 『嵐が丘』の起源を探った先行研究の代表的なものとしては、たとえば Edward Chitham, *The Birth of Wuthering Heights: Emily Brontë at Work* (1998) 等がある。ここでチタムは、エミリの創作過程を跡づけながら、エミリの詩やゴッタル世界、その他の作家の文学と関連させつつ、作品のインスピレーションの起源を探っている。

ションの起源を探ることを試みてみたい。

文献資料に当たってみると、エミリの周辺で伝えられていたと推定される話のなかで、物語の素材となりそうなものが、少なくとも三つあったことがわかる。すなわち、ヒースクリフを彷彿させる人物として、ウェルシュ (Welsh)、ジャック・シャープ (Jack Sharp)、ヘンリ・カッソン (Henry Casson) の三名が浮かび上がってくるのである。「人の口をとおして語り伝えられた話」という意味で、それらを〈伝説〉として捉え、総称して〈ヒースクリフ伝説〉と呼ぶこととする。まず、三つのヒースクリフ伝説についてそれぞれ検討することから出発し、『嵐が丘』との比較考察、およびさらなる〈伝説〉誕生の可能性の探究をとおして、作品の起源に迫りたい。

1. ヒースクリフ＝ウェルシュ説

古い伝説のひとつは、ウィリアム・ライト (William Wright) による著書『アイルランドのブロンテ家』(*The Brontës in Ireland*, 1893) で取り上げられているもので、ヒースクリフの原型はウェルシュという人物であったとする説である。サブタイトルが *Facts Stranger Than Fiction* と題されていることからもうかがわれるように、「事実」であることを強調しつつ、「フィクションよりも奇妙」と表現することによって、かえってそれが小説的な内容を含んでいることを暗示しているとも言える。

ライトは、アイルランドのカウンティ・ダウン (County Down) のラスフライランド (Rathfriland) 近くのフィナード (Finard) 出身の元長老派伝道師である。彼自身が本書の「まえがき」(Ch. 2 “The Chief Sources of Information: Preliminary”) で述べているところによれば、ブロンテ家の近所に住んでいて彼らのことをよく知っていた乳母や、その他数人の知人から、ライトは、ブロンテ一家の話を聞いたとのことだ。

とりわけ、ライトに最初に古典を教えた教師ウィリアム・マクアリスター

(Rev. William McAllister) からの影響は大きかったようである。マクアリスターは、子供のころのパトリック・ブロンテ (Patrick Brontë) のことを知っていて、パトリックの父ヒュー (Hugh Brunty) が、『嵐が丘』の物語の土台となった出来事について語り、聴く者たちを魅了するのを耳にしていた。ライトはこの教師から、詳細なブロンテ伝説を聞いたのである。ただ、マクアリスターは、ギリシャ語を正確に教えることよりも、生徒に神話のエピソードに興味を持たせて、自分の言葉で生き生きと再現することを重視するというようなタイプの教師であったと、ライトは述べている。したがって、この影響を受けたライトが、正確な知識よりも、自分なりに再生・変形して物語る方法を身につけたという可能性も考えられる。ライト自身も、「自分の話を進めてゆくにあたって、典拠を引いたり、どのようにして情報を得たかという説明を差し挟んだりして、中断する必要は必ずしもない」ことを、著書のはじめで断っている。

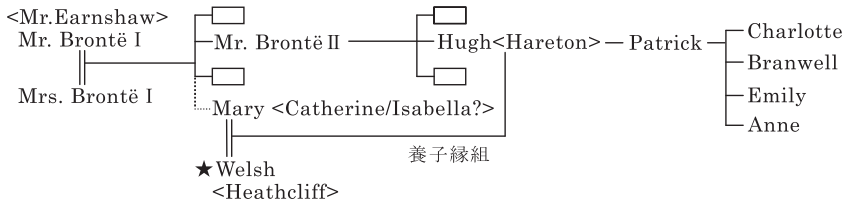
このようなライトの著作が、研究書としての信頼性に欠けることは、すでに批評家たちによっても指摘されている。エドワード・チタム (Edward Chitham) は、「ライトの記録には、強力な、あるいは緻密な学術的研究として認められるものは何ら見られず、その方法は、直観と魔力、長々とよく覚えてはいるものの不正確な記憶、そして優雅な言葉を用いるといったものである」(Chitham, *BIB* 8) と批判している。ダドリー・グリーン (Dudley Green) は、ライトの著書は、それまで無視されてきたアイルランドのブロンテ文学への影響や、自らが属する長老派のブロンテ文学への影響を強調することを目的としているのではないかと、懐疑の目を向ける (Green 20-22)。彼も指摘するとおり、ライトの著作が発表されたのは、『嵐が丘』が出版されてから40年以上も後のことで、話に登場する人物がもう誰も生きていない時期になってからの調査に基づくものであるため、その記述の信憑性は、証言者の発言によってもはや裏づけることができないことは、やはり注意しておかなければならないだろう。

さて、前置きが長くなったが、ライトによる説の内容を、ざっと解説しておこう（以下、[図 1] の系図参照。＜ ＞内は、『嵐が丘』の作品中で対応する人物を示す）。ブロンテ姉妹の父パトリックの父ヒュー、そのまた祖父であるブロンテ氏の代にまで、伝説は遡る。ブロンテ氏はドロジェダ（Drogheda）の少し北、ボイヌ川（the Boyne）岸の農場に住み、農業とともに家畜業にも携わり、リヴァプールへ行って家畜を売っていた。あるとき、夫妻でリヴァプールへ行った帰りに、船に捨てられていた「幼い、色黒の、汚い、裸同然の子供」（Wright 19）を見つけ、捨て子の施設がある遠いダブリンまで送り届けることもかなわず、やむなく夫人の勧めで、ブロンテ氏はこの子を家に連れ帰り、自分の子供たちとともに育てる。子供は、肌の色から、おそらくウェールズ人だと推測され、ウェルシュと名づけられる（以下の図では、ヒースクリフに該当する人物に★印を付す）。ブロンテ家の子供たちから侵入者として嫌われながら育ったウェルシュは、「むっつりとした、嫉妬深い、ずる賢い」（Wright 21）人間になってゆく。しかし、ウェルシュはブロンテ氏になつき、子供たちの悪口を吹き込んで、主人のお気に入りの座を獲得するようになる。ブロンテ氏は商売に行くときには、つねにウェルシュを連れ回すようになり、やがてウェルシュはブロンテ氏の仕事の片腕として頼られるようになる。

リヴァプールから帰る船上で、突然、ブロンテ氏が急死する。贅沢に育ち、すでに成人していたブロンテきょうだいたちは、商売にはまったく精通していなかったため、ウェルシュがうやむやにしてしまった資産を、取り戻すことができない状態に追い込まれた。ウェルシュは彼らに会って、ブロンテ家の経済を立て直す条件として、ブロンテ家の末娘メアリと結婚することを要求する。きょうだいたちから拒絶されたウェルシュは、「メアリを必ず妻にしてみせる。そして、家から皆を追い出して、この家を自分のものにしてやる」と宣言して、姿を消す。

このあと、ウェルシュは復讐を展開してゆく。ブロンテ家の農場主は不在地主となっていて、その領地は大地主（squire）と呼ばれる代理人（agent）に

■ Boyne 川岸の農場 = <Wuthering Heights>



[図1] Heathcliff = Welsh 説

よって取り仕切られていた。代理人は地域の大家で、治安判事、大陪審員をつとめ、とりわけ地代の徴収に当たっては、専制的な権力を奮っていた。この代理人の仕事を、複数の土地管理人や副代理人（sub-agent）たちが補佐したが、ウェルシュは代理人に多額の賄賂を支払うことによって、空席となっていた副代理人のポストを手に入れた。借地人と大地主との調停に当たることを職とする副代理人は、収入はわずかではあるものの、借地人から金を絞り取る特権をもつ立場にあった。ウェルシュは貧しい借地人には横暴に振る舞い、金持ちにはへつらって、悪辣さを発揮する。彼はこの地位を利用して、ブロンテ家の農場を手に入れようと、あれこれ策略をめぐらす。ブロンテ家の兄弟たちもそれぞれ職に就いて経済の立て直しの努力に励んでいたため、なかなか目的を達成できなかった。

今度はウェルシュは、女性スパイを使い、その仲介によってメアリを誘惑し、彼女を誘き出して密かに結婚式を取り行う。ブロンテ家のレディーと結婚したウェルシュは、代理人に金を貢いで、借地人の地位を手に入れる。こうして彼はついに、恩人の農場をわがものとするに至り、ブロンテ家の人々は離散してしまったのだ。

その後何年かたって、代理人は厳しい取り立ての恨みを買って暗殺され、ウェルシュが手に入れたブロンテ家の屋敷も、ほぼ同時期に火事で焼け落ち、破産したウェルシュは、副代理人の地位も失う。彼は妻メアリの取り成しで、

彼女の子沢山な兄のひとりと文通し、許しを請うて過去の償いをしたいこと、そして、自分たちには子供がいなくて、立て直した農場を遺す後継ぎがないため、甥のひとりを養子にしたいと申し出る。教育を与えることなど、養子縁組の契約が進められるが、条件のひとつとしてウェルシュは、今後生みの親がわが子といっさい接触をもたないということを、そのなかに含める。

ウェルシュ夫妻は、アイルランド南部に住んでいたメアリの兄の家を訪ね、息子のひとりヒューを気に入り、彼に取り入って養子にする同意を取りつける。こうして、当時5〜6歳だった少年ヒューは、叔父と叔母とともに馬車に乗せられ、期待に胸をふくらませながら旅立つ。しかし、早くも旅の道中から、ウェルシュは本性を露わにして、ヒューに乱暴な言葉を浴びせ、暴力を振るい始める。ヒューをボイヌ川岸の、古いブロンテ家の農場へ連れて行ったあと、ウェルシュは約束を破って少年を虐待し、ひどい環境のもとで、使用人として働かせる。自分の親が住んでいる故郷の場所も知らされないまま、野蛮人のように育ったヒューの苦悩——このあたりのことを、ライトは物語性豊かに描いている。数年後、15歳のときにヒューは、ついに逃亡を企て、アイルランド北部へと逃げ伸びる。そのあと、ヒューがカウンティ・ルース（County Louth）のダンダルク（Dundalk）近くで、いかに職を得て道を切り開き、のちにパトリックの母となる女性に出会って結婚したか……このあとの話は、さしあたりヒースクリフを中心とする物語とは無関係であるため、ここでは省略する。

ヒューは、子供時代のこの苦難の物語を、ブロンテ家の遺伝とも言えるストーリー・テラーとしての才能を用いて、人々に語り聞かせた。それを聞きながら育った息子パトリックが、さらに自分の子供たちにこの話を語り聞かせ、彼らの想像力に火をつけたのだ。だから、『嵐が丘』のストーリーのもととなった出来事は、この作品が書かれる前からブロンテ家で共有されていたのだ、というのがライトの主張である。

では、ライトが語る以上の物語（ヒースクリフ＝ウェルシュ説）と『嵐が

丘』のストーリーとは、どのような点に関連しているかについて、検討してみよう。ブロンテ氏がリヴァプールで捨て子ウェルシュを拾ったことは、アーンショー氏がリヴァプールで浮浪児ヒースクリフを拾ったことと対応する。もっとも、アーンショー氏がひとりで子供を連れ帰り、妻の怒りを買うのに対して、ブロンテ氏の場合は、同行していた妻の勧めで子供を連れ帰ったという点は、異なる。拾った子をわが子以上に気に入り、その力量を認めたという点では、両者は共通している。そのような父親の依怙蟲屑に対して、実の子が嫉妬して、父の死後、拾い子の立場を失墜させたという点も似通っている。ただし、『嵐が丘』では、敵となった子がヒンドリーひとりであるのに対して、ブロンテ家では複数の子供がいたというように、細部は異なる。ちなみに、チタムも指摘しているように、ヒースクリフもウェルシュもともに、洗礼名と姓とを兼ねた名前をもっているという点でも、共通している (Chitam, *BWH* 120)。

ウェルシュが結婚の目当てとして選んだメアリは、恩人の娘であるため、『嵐が丘』ではキャサリンに当たるようであるが、むしろ、彼がメアリと結婚しようとした目的は、ブロンテ家を乗っ取り、復讐するという打算にあったように思われる。伝説では小説と違って、ウェルシュの心情が述べられているわけではないし、彼のメアリに対する愛情は、女スパイを通じた策略の一部として述べられているにすぎないため、むしろメアリは、イザベラに近い存在であったと言えるのではないだろうか。

正統なブロンテ家の末裔であるにもかかわらず、誘拐同然のような形でウェルシュの支配下に置かれ、労働者の地位に失墜させられたヒューは、『嵐が丘』ではヘアトンに対応する。ヒューの目から見たウェルシュの物語は、まさに恩人の家に乗っ取り、その家の子供、さらにその子供の世代にまで復讐を企てた悪人としてのヒースクリフの原型を形作っている。その容貌や振る舞いに至るまで、ヒースクリフとの類似性は濃厚である。もちろんこれは、最初にも述べたとおり、ライトが、『嵐が丘』が出版されたあとに、作品から逆に引き出した物語であった可能性もあることは、差し引いて考えなければならない。

ライトによる説は、あくまでも〈伝説〉の域を出ないと言わなければならない。他方、その伝承的物語形式を借りて、たんなる研究書によっては掘り起こすことのできない『嵐が丘』の〈起源〉に近づき得ているという点は、評価できるだろう。以上が、「ヒースクリフ＝ウェルシュ説」のあらましである。

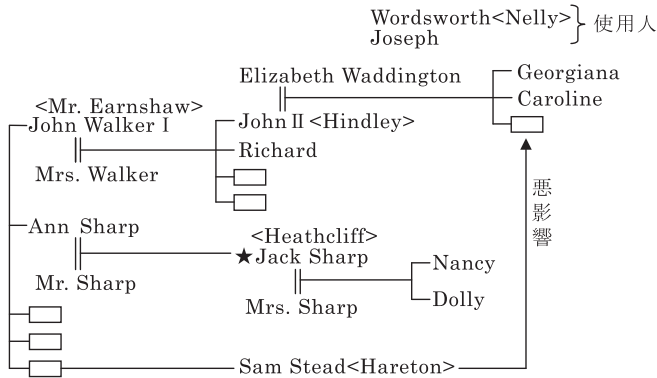
2. ヒースクリフ＝ジャック・シャープ説

第二に、「ヒースクリフ＝ジャック・シャープ説」を取り上げる。これは、ウィニフレッド・ジェラン (Winifred Gérin) が著書『エミリ・ブロンテ』(*Emily Brontë*, 1971) において指摘しているものである (Gérin 75-80)。エミリは、ハリファックス (Halifax) の東のほうの丘の上に立つ建物で、ミス・エリザベス・パチュット (Miss Elizabeth Patchett) が経営する学校ロー・ヒル (Law Hill) に、1838 年から翌年にかけて約半年間、教師を勤める。かつてこの建物を建てた人物が、ジャック・シャープである。ロー・ヒルの歴史およびシャープにまつわる事情は、キャロライン・ウォーカー (Caroline Walker) の日記に記録されている。また、この話は、その地域一帯でよく知られていて、学校でも噂になっていたはずなので、ロー・ヒル時代にエミリも同僚の職員から聞いたはずだと、ジェランは推測している。なお、エミリの同僚のひとりに、アーンショウという姓の人物がいたことにも、ジェランは言及している。

ロー・ヒルからわずか一マイルほど離れた所に、ウォルタークロー・ホール (Waltherclough Hall) という建物があった。イニシャル WH が暗示するように、これは Wuthering Heights 屋敷のモデルとも考えられる。この屋敷にまつわる話は、1720 年代の記述に遡る。当時、屋敷に住んでいたのは、ジョン・ウォーカー (John Walker) とその妻、四人の子供、それにウォーカー氏の未婚の姉妹たちだった ([図2] 参照)。ウォーカー家は農業を営むかわら、羊毛の輸出業に携わっていた。

ウォーカー家の長男ジョン (John II) はケンブリッジ大学へ行き、学者タイ

■ Walterclough Hall=<Wuthering Heights>



[図2] Heathcliff = Jack Sharp 説

ブの人間で、次男リチャードはロンドンで法律を学ぶが、17歳で死亡。そこでウォーカー氏は、子沢山の妹ミセス・アン・シャープ（Mrs Ann Sharp）の息子のひとりジャックを養子にして、ウォルタークロー・ホールに引き取る。そしてジャック・シャープを、息子の代わりに羊毛業の商売のパートナーとして育て上げる。シャープは次第に横柄になり、伯父を苛立たせる一方で、伯父の心をしっかりとつかんでいたし、ウォーカー氏もシャープ無しには商売をやっ
てゆけなかった。こうしてウォーカー氏は、商売をシャープに任せて1758年に引退し、はじめにハリファックスへ、のちにヨーク近辺に移り住んで、1771年ごろ55歳で死ぬ。シャープはウォーカー氏の甥であって、浮浪児ヒースクリフとは多少立場が異なるものの、人物間の構図は似ている。ウォーカー氏の最期は、わが子よりもヒースクリフを可愛がって苛立っていたアーンショー氏の晩年と重なり合うように思えるのである。

伯父から商売を託され、安い賃貸料で屋敷を借りていたシャープは、ウォルタークロー・ホールを我が物とし、先代ウォーカー氏の財産で、妻とともに贅沢三昧の暮らしを続けた。ウォーカー家の法律上の相続人である二代目ジョン

は、当時、ヨーク州のピーターゲイト（Petergate）に住んでいたが、掠奪者シャープとも礼儀正しい交際を続け、アーンショー家の二代目hindリーとは異なったタイプの人物だった。

しかし、このあとの経緯には、ふたたび『嵐が丘』との類似点も見出される。シャープ夫妻は、末娘ドリー（Dolly）の洗礼のさいにパーティーを開き、当時離散していたウォーカー家の人々を屋敷に招く。このとき、ジョンは教会で若い女性エリザベス・ワディントン（Elizabeth Waddington）と出会って恋に落ち、即求婚する。するとエリザベスは、母親の差し金により、ウォルタークロウ・ホールを新居とすることを結婚の条件として主張したため、ジョンはやむなくシャープに屋敷から立ち退くようにと言う。これに対してシャープは、激しい怒りを示すが、法的手段に訴えることがかなわず、立ち退かざるを得なくなる。こうして彼は、ウォルタークロウ・ホールの近くに、ロー・ヒル屋敷を建てて、移り住むことになる。ウォルタークロウ・ホールを立ち退くさいのシャープ夫妻のやり方は、屋敷に備え付けられたものや家財をありったけ略奪してゆくという凄まじいものだった。そして、ウォルタークロウ・ホールを抵当に入れたままジョンに引き渡して、自分たちはロー・ヒルに移り住んで羊毛業の商売を続け、相変わらず贅沢な生活を続けた。

その後もシャープはさらに復讐を展開した。ジョン・ウォーカーには、サム・ステッド（Sam Stead）という年下の従弟がいたが、シャープはサムを自分の弟子にして、彼に酒と賭博に浸らせ、墮落させた。のちにシャープが倒産したとき、職のなかったサムがウォルタークロウ・ホールに引き取られて来る。サムは、ウォーカー家の子供たちに勉強を教える役を担うが、わざと子供たちに悪影響を与えたり、使用人を対立させたりするなどして、ウォーカー家に混乱をもたらす。

シャープがヒースクリフに対応するとすれば、彼によって墮落させられたサムは、ヘアトンの立場にあると、ジェランは指摘している。たしかに、立場のうえでは、そういう対応が成り立つが、酒や賭博に浸るサムの墮落の仕方には、

ヒンドリーの面影もちらつくように思える。ちなみに、ウォーカー家の使用人のなかに、ワーズワース（Wordsworth）という名の乳母がいて、彼女が女の子たちの相談役として、ネリーに対応する人物だったこと、また、シャープが雇った使用人のなかにジョウゼフ（Joseph）という名の者がいたことも、ジェランは指摘している。

なお、シャープが破滅しかけたときに、二代目ジョン・ウォーカーは、二度までも彼を救おうと援助している。そのうち一度は、妻に隠して彼女の金を使ってまで助けようとした。なぜ自分に害を与えた略奪者シャープを、ジョンが繰り返し助けようとしたのかは、謎であると、ジェランは言う。筆者はこの二人の不思議な関係のなかに、ヒースクリフとヒンドリーの関係とは別に、ヒースクリフとヘアトンとの心情的関係のようなものも重なり合っているように考えるのである。

シャープの破滅のきっかけになったのは、アメリカの独立戦争だった。彼は、当時アメリカに住んでいた兄弟のひとりをとおして、アメリカで商売の取引をしていたのだが、戦争によって、顧客からの送金が断たれ、主たる収入源を失うことになったのである。そのうえ、シャープの娘ナンシー（Nancy）が恋人に捨てられるという出来事が起り、シャープは娘の名誉の修復のためにロンドンへ行くと行ったきり戻らず、1798年に死亡する。

こうしてロー・ヒルの商売は終わりとなり、ジョン・ウォーカーが莫大な損失を負うこととなる。しかしジョンは、時代の変化を読み取り、ウォルタークローに工場を建てて機械化を導入し、苦労を経て、のちに成功し、繁栄を誇ったとのことである。

1837年にエミリがロー・ヒルの学校に到着したときには、ジョン・ウォーカー夫妻はすでに亡くなっていたが、娘キャロラインがまだウォルタークロー・ヒルに住んでいたとのことである。そして、先にも述べたとおり、このキャロラインが以上の顛末を、日記に記しているというわけである。ちなみに、キャロラインの兄弟は、シャープとサムの影響によって、酒浸りで死んでし

まった。シャープの復讐の爪痕は、このような形でウォーカー家に残されたとも言えるだろう。

以上見てきたとおり、「ヒースクリフ＝ジャック・シャープ説」は、伝説としての信憑性はかなり高いように思われる。恩人の家に乗っ取り、その子孫に復讐しようとした悪党として、ジャック・シャープはヒースクリフの原型を形作っていると言えるであろう。略奪者としてのその振る舞いや、執念深い性格も、ヒースクリフと重なり合う。しかし、周囲の人物の配置や性格には、類似点と同時にかなり異なった点が見られることも、たしかである。印象的なのは、最後にシャープが破滅し、彼が害を与えようとした恩人の家が復活することだ。このような一族の年代記的な枠組みという点で、シャープ伝説は、『嵐が丘』と共通しているのである。

3. ヒースクリフ＝ヘンリ・カッソン説

次に第三の説として、「ヒースクリフ＝ヘンリ・カッソン説」を取り上げる。これはメアリ・バターフィールド（Mary Butterfield）によって、1970年代に唱えられた説である²。

1819年にパトリック・ブロンテがハワースの教会に赴任したとき、その地域いちばんの大地主であったヒートン（Heaton）家は、ハワース教会の管財人でもあった（[図3] 参照。系図の右端にブロンテ四きょうだいがいて、その父 Patrick が教区牧師で、Robert VII と関係があったことを示す）。ヒートン家は、教会から二、三マイル離れた所にあるスタンブリー（Stanbury）という荒れ地の村に建ったポンデン・ハウス（Ponden House）に住んでいた。ポンデン・ハウスは、チューダー王朝様式の邸宅で、1513年以来ヒートン家に

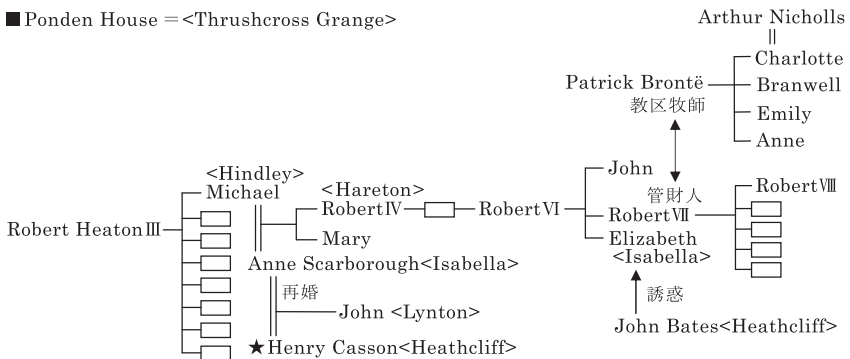
2 資料として、*The Brontë Connection* と題するドキュメンタリー映画におけるバターフィールドのインタビューのスク립トを使用した。

よって所有されていて、1801年に修復された。これは、『嵐が丘』の冒頭にある年号と一致する点で、注目すべきであることは、ジェランも指摘している (Gérin 31)。ボンデン・ハウスは、シュラスクロス・グレンジのモデルになったとされる。

ヒートン家には5人の息子たちがいて ([図3] で、Robert VII の子供が、Robert VIII を筆頭に並んでいる)、彼らはプロンテ家の子供たちよりも年下だったが、両家の子供同士の間には、親しい交際関係があったようだ。プロンテきょうだいは、ヒートン家から本を借りたり、音楽好きのヒートン兄弟と合奏をしたりして楽しみ、ブランウェル (Branwell Brontë) はヒートン兄弟の影響で狩を好むようになった (Gérin 32)。

さて、話は1630~1640年代の三代目ロバート・ヒートンの時代に遡る。ヒートン家は財産家として繁栄し、ロバートには、長男マイクル (Michael) 以下8人の息子がいた。しかし、後継ぎマイクルは、よからぬ仲間とつき合って、父の信頼を裏切り、妻アン・スカバラ (Anne Scarborough) 名義の土地を抵当に入れて借金を重ねるようになる。こうして、1641年にロバートが脳卒中で倒れたとき、彼は財産をマイクルには遺さない旨言い渡して死ぬ。ところが、遺言状は無効となり、結局、全財産をマイクルが継ぐことになる。実は、

■ Ponden House = <Thrushcross Grange>



マイクルをこのような墮落へと追いつめたよからぬ仲間が、ヘンリ・カッソンなる人物であった。バターフィールドは、マイクルの背後にカッソンがいたことと、墮落したヒンドリーの背後にヒースクリフがいたこととが、対応関係にあると指摘している。

父ロバートが死んだ3年後に、マイクルは謎のうちに失踪し、1643年には、彼はすでに死んだとされた。沼に落ちたのか、あるいは突き落とされたのかと、さまざまな憶測がなされたが、マイクルの死因は不明である。一方、1642年に清教徒革命が起り、王党派だったヒートン家の立場は落ち目となる。それに対して反王党派だったカッソンは、1644年、クロムウェルの時代になるとともに勢力を拡大し、ハワースの長官（Chief Constable）となって、ボンデンへの支配を強化する。カッソンは、マイクルの妻である未亡人アンに求婚し、ヒートン家の地所をすべて手に入れる。

アンには、マイクルとの間にできた二人の子供ロバートとメアリがいた。カッソンは、アンに残酷な仕打ちをし、本来ならばヒートン家の後継ぎであった、彼女の連れ子ロバートⅣに教育を与えず、農地で働かせる。そして、自分とアンとの間に生まれた息子ジョン・カッソンに財産を継がせようとする。つまり、財産を奪う目的でカッソンが結婚した相手のアンは、『嵐が丘』ではイザベラに対応する。そして、本来の後継ぎであったはずのロバートはヘアトンに、カッソンの息子ジョンは、リントンに対応する。ヒートン（Heaton）は、綴りを少し変えればヘアトン（Hareton）となり、名前が似ていることも注目できる。

さて、このあとの成り行きを見ておこう。1660年、チャールズ二世による王政復興の時代となり、カッソンの地位が危うくなってゆく。1662年、アンはヒートン家の地所を回復し、翌年にロバート・ヒートンⅣが成人して、相続権を主張する。怒ったカッソンは、ロバートが遺産相続したものを本人に買い取らせるなど、暴虐を強いてあがくが、結局は追い出されて、アーズリー（Ardsley）へ敗退する。驚くべきことに、彼がこれまで重婚していたことが判

明する。カッソンは、最初の妻のもとへ戻ったとか、病気になったとか、さまざまな言い伝えがあるが、真相は不明である。

カッソンの息子ジョンは、ポンデンに留まる。ロバートは、本来ならば敵であるはずの彼に対して慈悲深い態度で接し、1770年、ジョンは死ぬとき、すべてをロバートに返したとのことである。バターフィールドは、ヘアトンがヒースクリフから残酷に扱われたのに、ヒースクリフと絆で結ばれていたという奇妙な関係との対応を、ここに見るのである。

ヒートン家に関しては、まだ後日談がある。6代目ロバート・ヒートンの娘エリザベス (Elizabeth) が、ジョン・ベイツ (John Bates) という大酒飲みの商人に誘惑され、一家に恥辱をもたらす。父親のロバートは、何とか賄賂で娘と結婚させようとするが、ベイツはそれに応じず、結局、エリザベスは肺炎にかかってポンデンに戻り、赤ん坊を産んで母子ともに死んでしまう。エリザベスがベイツから受けた虐待は、イザベラがヒースクリフから受けた虐待に類似していること、エリザベスの出産による死は、キャサリンの死に似ているということも、バターフィールドは指摘している。

このようにヒートン家には悲劇が続き、6代目ロバート・ヒートンは、後継ぎの息子ジョンが24歳で死ぬに及んで、悲しみに打ちひしがれ、1817年に死ぬ。こうして次男ロバートが7代目になるが、パトリック・ブロンテがこの領主に初めて会ったころには、すでにヒートン家の衰退は始まっていて、8代目ロバート・ヒートンが1898年に死んだのを最後に、この家系は断絶した。

『嵐が丘』が出版されたとき、ヒートン家の人々は大きなショックを受け、その後、ヒートン・ブロンテ両家の関係は急速に冷却していったとのことである。パトリックの死後、亡きシャーロット (Charlotte Brontë) の夫アーサー・ニコルズ (Arthur Nicholls) が聖職を継ぐことを、ヒートン家が許さなかったのにも、そのあたりの事情が影響しているのだと、バターフィールドは推測している。ここから言えることは、『嵐が丘』の題材には、ヒートン家で起こった事実がたくさん含まれていて、当事者のヒートン家がそれに気づいた

であろうことだ。

ヒートン家の財産を乗っ取ろうとしたカッソンの手口、すなわち、ヒートン家の二代目領主を墮落させ、結婚を手口にして全財産を手にしようとしたこと、そして、三代目まで墮落させて使用人にしようとしたことは、ヒースクリフのやり口と似ている。そして最後には失墜し、その後正統な家系が回復されるという形も共通している。

4. 伝説とは何か

以上三つのヒースクリフ伝説をまとめると、いくつかの共通点が浮かび上がってくる。議論の出発点で、「他人の家を乗っ取る」という特色を挙げたが、そのほかにも、ヒースクリフに対応する人物が、ヒンドレーの立場にある人間を出し抜くこと、その子孫であるヘアトンの人物を墮落させること、家を追い出されて復讐を試み、最後には落ち目になることなどが共通する。ただし、細かな点では多少ずれもある。恩人に育てられて可愛がられるという挿話は、ウェルシュ説とシャープ説には見られるが、カッソン説にはない。イザベラと対応する女性と結婚して財産収奪の足掛かりとするという要素は、ウェルシュ説とカッソン説には見られるが、シャープ説にはない。

しかし、ここで注目すべきことは、似た話が複数あったということである。互いに別個の話であるにもかかわらず、少なくとも三つのよく似た話が、エミリの周辺にあったことは、何を意味するのだろうか？ やや粗い表現をするなら、こういう話は世間にいくらでもあったと言えるのかもしれない。にもかかわらず、私たちはそのストーリーに、紛れもない『嵐が丘』の刻印を見る——それはとりもなおさず、そこに潜んでいた口承物語的な要素が、エミリに拾い上げられ、小説化されたとき、ひとつの「伝説」の定型となったことを意味するのではないだろうか。重要なのは、人々がつねに注目する中心人物はヒースクリフであるということだ。

ジョウゼフ・キャンベルは、英雄神話・伝説では、主人公が別世界へと旅立ち、イニシエーションを経て帰還するという基本構造が見られることを指摘する（Campbell 23-31）。つまり、英雄は「こちら側」から「あちら側」の世界へ行って、再び元へ戻るという道筋を辿るわけである。それに対してヒースクリフは、もともと「あちら側」の未知の世界に属し、「こちら側」へやって来て、最後に不可解な「死」という形で消えてゆく人間であるため、それとは逆の方向性をもつタイプである。したがって、ヒースクリフをめぐる伝説を英雄伝説と区別して、「悪人伝説」として位置づけておこう。

さまざまな口承物語のなかで、反復されているモチーフが存在することは、多くの研究者によって指摘されている。とりわけロシア・フォルマリズムの批評家ウラジミール・プロップ（Vladimir Propp）は、民間説話のモチーフのタイプ分けによって、それらが互いに類似していることを立証しようと試みたことで有名である。プロップはたとえば、昔話の導入の状況のあとに、「家族の成員のひとりが家を留守にする」というパターンが続くことを挙げ、「家を留守にしうるのは、年長の世代に属する人物」（プロップ 42）であると説明している。これは、一家の主人アーンショー氏がリヴァプールへ旅に出るという『嵐が丘』の物語の導入部に似ている。プロップは、そのあと「敵対者」が話に登場することを挙げ、「この人物の役割は、幸福な家族の平安を破ること、なんらかの不幸・災いをもたらすこと、害を加え、損害を与えること」（45）であると指摘している。この点も、一見、ヒースクリフの登場と重なり合っているようだが、プロップの定義する「敵対者」は、それ自身が主人公に転じることはないため、『嵐が丘』の物語展開との共通点は、このあたりまでに留まる。

一方、民間伝承文学研究者マックス・リュートイ（Max Lüthi）は、伝承のなかに登場する主人公の特色として、「孤立」³した存在であることを挙げる。

3 ただしリュートイは、〈昔話〉と〈伝説〉とを区別して「孤立」という言葉を使

また、昔話や伝説においては、不思議なものが最後まで説明されないままに留まるという特色も指摘している（リューティ『昔話と伝説』19）。リューティは、さまざまな伝承文学に繰り返し現れるモチーフ群のなかで、とりわけ「運命の不可避性」「人間が自分に捕らわれ、自分自身が原因で破滅する」という主要テーマを抽出して、これに着目している。伝承文学において、私たちは多様に变化した形でこのテーマに出会う。悪人はしばしば自分自身で破滅するというわけである（リューティ『民間伝承と創作文学』142-83）。これらの特色と照らしてみたとき、私たちは、ヒースクリフ伝説のなかにも、孤立し、自分に捕らわれて最後には破滅する悪人の運命のモチーフを見出すことができる。したがって、大まかには、昔話や伝説の型に当てはまるわけである。

では、この悪人伝説を小説化すれば、『嵐が丘』という創作文学になりえるかということ、そうは言えない。もちろん、リューティも指摘するとおり、昔話や伝説では、創作文学におけるほど、人物たちが内面的な世界や心の深みを持たず、ストーリー的存在に留まっているからという理由（*ibid.* 179）も考えられる。伝説では、出来事や人間の行動によって織り成されたストーリーはあっても、人間の心情がないからだ。「乗っ取り」「略奪」「復讐」という〈行為〉があり、それらの行為を引き起こす〈動機〉はあるのだが、それ以外の内面的心理はすべて削除されている⁴。

しかし、理由はただそれだけではない。この悪人伝説には、『嵐が丘』に必

ゝ用いている。彼によれば、〈伝説〉では人間の「孤独」が描かれているのに対して、より図形的な〈昔話〉では、多様な存在様式をもった複雑な人間として描かれていないため、「孤独」ではなく「孤立」と呼ぶべきだとしている（『ヨーロッパの昔話——その形式と本質』200-03）

4 プロップは、昔話の研究において重要なのは、「登場人物たちが何を行うか」という問題、つまり、「筋という観点から規定された登場人物の行為」であり、登場人物たちの「機能」こそが、昔話の根本的構成要素であると述べている（プロップ33-35）。

須の要素が、何か決定的に欠けているように思われるのだ。その必須の構成要素とは、主人公が、自分以外の男性との結婚を望む恋人の心の内を知って、失踪するという出来事ではないだろうか。この出来事がなければ、ヒースクリフのあらゆる悪事も意味をなさなくなってしまうのではないか。筆者がこのことを再認識したのは、近年、ヒースクリフの運命の要となる、この不可欠の部分を補完するような新〈伝説〉に出会ったとき、あたかも欠けたパズルのピースが埋まったように感じられたことがきっかけだった。

5. ヒースクリフ＝ロバート・クレイトン説

サラ・フェルミ (Sarah Fermi) は『エミリー・ブロンテの日記』(*Emily's Journal*, 2006 [以下、『日記』と記す])において、ヒースクリフとは、エミリーの近所の知り合いで、彼女と恋に陥り、若くして死んだロバート・クレイトン (Robert Clayton) という若者であったという説を打ち出している。この新しいヒースクリフ伝説は、まさに、愛する女性の心変わりに傷ついた少年ヒースクリフの面影が前面に現れた新伝説なのである。

筆者がこれを敢えて学説と呼ばず、〈伝説〉と呼ぶのは、この『日記』が、研究書ではなく創作という形で発表されたためである。フェルミは、ブロンテ研究に携わり、エミリーに関するリサーチに約15年にわたって取り組んだ成果として、本書を出版した。本書に序文を添えたパッツィ・ストウンマン (Patsy Stoneman) によれば、フェルミの方法は、教会記録や土地の登記、遺言状、手紙、文献などといった確固たる証拠に基づいた歴史家の手法であり、彼女がすでに発表したいいくつかの論文は、専門家によって信頼できる学術研究として評価されているとのことである。

ロバート・クレイトンは、貧しい職工の息子として、エミリーより数週間遅れで生まれた同じ年の男性で、エミリーが荒野を散歩したときに出会いそうな場所に住んでいた実在の人物である (以下、[図4] 参照)。彼の誕生と18歳にお

ける死亡については、ハワースの教会の記録に残されている。また、エミリは1835年、17歳のとき、突然学校に入れられるが、その理由が不明であるため、フェルミは、エミリが誰かとの不適切な関係を打ち切るために、学校に追いやられたのではないかと推定する。そして、エミリの詩を年代順に読んでゆくと、1836年と1837年の間に、詩の調子が突然変わって、悲嘆と喪失をテーマとした暗い憂鬱な作品へと変わり、1837年2月まで何も書いていないことが判明する。そこで、この時期にエミリが、人生を変えるような何らかの経験をしたのではないかという推定のもとに、ハワース教会墓地の埋葬記録を調べてみたところ、浮かび上がってきた候補者がロバート・クレイトンで、彼がちょうどこの時期に死亡していることがわかったという。そこでフェルミは、ロバートがエミリの恋人で、恋人との死別という個人的な理由があったために、『嵐が丘』を書いたとする仮説を立てたのである。

さらに、それに付随する証拠がいくつか挙げられている。第一は、ロバートの兄ジョンが弟に先立って1833年に死亡していることと、エミリが詩「私が確信をもっていたときに……襲ってきた死」のなかで、二つの関連のある死について謳っていることが符合する点。第二は、「ゴンドル物語」の詩のひとつに、「A. E. と R. C.」というイニシャルが並んで使用されていて、A. E. は「ゴンドル物語」のアレグザンダー・エルベであると考えられるが、R. C. のほうは「ゴンドル物語」の登場人物では当てはまりそうな人物がいないため、ロバート・クレインを指しているのではないかという推定である。

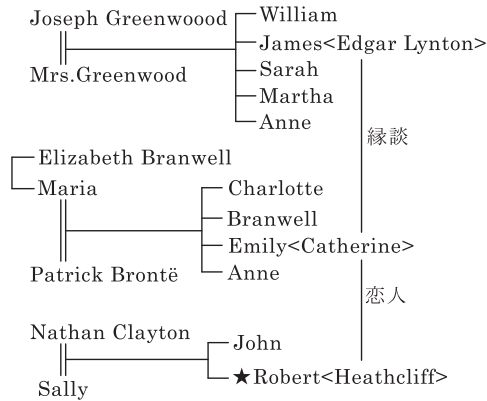
しかし、事実の裏付けはそのあたりまでである。それは、フェルミ自身も述べているとおり、もしエミリとロバートに関係があったとすれば、シャーロットをはじめとする関係者たちが、この社会的に不釣り合いな相手との関係を恥辱と考え、その事実をひた隠しにしたはずだからである。それゆえ、これ以上の証明は無理だと悟ったフェルミは、事実にできるだけ正確に基づいたフィクションという形で、自分の考えを肉付けするという方法を選択した。そこで、エミリが書いたとする日記を中心に据え、それに1848年にエミリが死んだあ

と、彼女の姉妹シャーロットとアン（Anne Brontë）が書き添えたとする文章を付け加えるという、複雑かつ巧妙な実験的方法を取るののである。したがって、事実や歴史的証拠に基づいて物語化されたこの話を、一種の〈伝説〉の誕生と見てよいのではないかと、筆者は考えるわけである。

そこで、フェルミによって提示された「ヒースクリフ＝ロバート・クレイトン」説を、ざっと見ておこう。1831年、〈エミリ〉（以下、『日記』中のエミリを〈エミリ〉と記す）とアンは、ゴンダルという名の島国に関する物語を作り、ドラマのシーンを演じる遊びを始める。その年の夏の終わり、〈エミリ〉の13歳の誕生日の直前に、二人が用事で出かけ、荒野を歩いているとき、クレイトン家のジョン・ロバート兄弟に出会う。〈エミリ〉とアンは、クレイトン兄弟に、いっしょにゴンダル物語のドラマを演じる遊びをしないかと誘い、以後四人は、家族には秘密で、荒野で週に一回会って遊ぶようになる。アンの注釈によれば、ロバートは粗野で無口だが善良でハンサムな少年で、すぐに〈エミリ〉に心を奪われるようになった様子だった。

出会いから2年後の1833年、兄のジョンが亡くなり、それまでの遊びは終わりとなる。しかし、〈エミリ〉はアンを連れずにひとりで荒野に出かけ続け、ロバートといっしょに過ごすようになる。やがて翌年1834年の夏ごろには、二人の関係は友情から恋愛へと変質し、あるとき石切り場でドラマを演じながら、思わず二人で抱き合っているところを、ある少年に目撃されたのをきっかけに、二人の関係は人伝に父パトリックと伯母ブランウェル（Elizabeth Branwell）の耳に入る。牧師の娘が、身分の低い職工の息子と交際していることを知って仰天した父と伯母は、二人を引き裂くために、〈エミリ〉を学校へ行かせる。こうして17歳の誕生日の前日に、〈エミリ〉はロウ・ヘッド（Roe Head）へと旅立った。

しかし、数カ月後に、〈エミリ〉は体調不良のために家に帰される。そこで今度は、父パトリックとブランウェル伯母は、〈エミリ〉をロバートから引き離す次なる計画として、スプリングヘッドのグリーンウッド家の息子ジェイム



[図 4] Heathcliff = Robert Clayton 説

ズと〈エミリ〉の縁談を進める。グリーンウッド家は、ブロンテ家とも親交のあった家で、一家の主人ジョウゼフは、荘園領主でかつ地方の治安判事という上流の家だった。あるとき〈エミリ〉はグリーンウッド家のパーティーに呼ばれ、ジェイムズと引き合わせられて、自分たちが結婚させられる予定であることに気づく。ジェイムズは聡明で魅力的な若者で、彼と結婚することは社会的階級の上昇を意味したため、〈エミリ〉は喜ばしく感じたと、『日記』には綴られている。こうして〈エミリ〉とジェイムズとの交際が始まるのである。

しかし、その間も〈エミリ〉はロバートのことを忘れたわけではなかった。荒野に出かけて、ロバートと再会したときには、彼女の心は揺れ動く。縁談の噂を聞き知ったロバートは、〈エミリ〉に向かって、自分と駆け落ちするのか、ジェイムズと結婚するのか、いずれかを選ぶようにと迫るが、〈エミリ〉はなかなか決断がつかないまま、自分の気持ちを書いた手紙をロバートに渡す。ロバートから別れの返事が届いたあと、〈エミリ〉は女中タビーに、ロバートへの愛を告白する。しかし、その翌朝〈エミリ〉は、ロバートの葬儀が執り行われることを知るのだ。彼は沼地に落ちて、発見される前に凍死したとのことだった。大きな衝撃を受けた〈エミリ〉は、ジェイムズ・グリーンウッドの求

婚を断り、ロバートを失った悲しみと罪悪感に苛まれ、苦悩の日々を送ることになるのである。

6. さらなる新説へ

以上の『日記』における一連の出来事から明らかになるのは、ロバート・クレイトンがヒースクリフのモデルで、エミリ自身がキャサリンのモデルとなったということだ。のちの1845年1月の日記で、〈エミリ〉が本格的な小説を書くという計画に触れている箇所で、「ロバートとジェイムズをめぐるジレンマを一部反映した自分自身の物語」を書くという構想を示していることから、作者フェルミの意図は明らかである。

しかし、注目すべきなのは、フェルミが推定した「事実」では、ロバートが先に死に、〈エミリ〉が後に遺されたのに対して、作品ではその逆で、キャサリンが先に死に、ヒースクリフが後に残ることである。本来の出来事に即するならば、ヒースクリフが先に死んで、キャサリンが後に残るという話であったはずのところを、作者は男女の役割をここで入れ替えたわけだ。ということは、〈エミリ〉は、ヒースクリフという人物のなかに、生き残った自分自身を投影したことになる。

現に、ロバートが死んだあとの〈エミリ〉の日記を見ると、そこからは、まるでヒースクリフの言葉が聞こえてくるようだ。彼が死んだ翌月には、「人生には私の興味を引くものはもう何もないと完全に確信している」（1837年4月）という言葉が見られる。

ロバートが死んだ一年後の日記には、〈エミリ〉は自分には取り憑いて離れない夢があることを記している。それは、黄昏時に荒野に一人でいるという夢で、小道でロバートを見かけ、彼のほうへ行こうとするのだけれど動くことができず、待つてほしいと声をかけようとするが、声が出ないという夢である（1837年10月）。

さらに、同年 12 月には、次のような心境が記されている。

But I feel strangely numb, as if I were wrapped in a blanket of misery which shuts out the world — everything seems far away. It is a kind of paralysis and I have no will to act. . . . Now I only want to sleep. (Fermi: December the 14th, 1837, EJB)

これは、キャサリンの死後生きる目的を失って、迷妄状態に陥ったヒースクリフの心境を映し出しているようである。

ロバートの死後、三年経つと、さらに日記にはこのように綴られている。

The present seems to have little significance for me and my feelings are alive only in dreams and in memory. . . . Sometimes when I wake in the early hours of the morning, I long to revisit the past so intensely I think I sense its presence. Lately I thought I could see Robert's face just outside my window, but when I lept from my bed to open it, he had vanished. I suppose I might have been dreaming. Or that I want to see him again so much that I imagine I see his face everywhere. . . . All I want it to go back to those happy years when I was young and alive and in love. That would be my heaven. (Fermi: January, 1840, EJB)

この箇所は、まるでキャサリンの亡霊に出会うことを 18 年間追い求め続け、やがてその幻影を見るようになった、死の近づいたときのヒースクリフの状況を映し出しているようである。

このように、〈エミリ〉がヒースクリフに自己投影しているさまが、フェルミの創作した日記からはうかがわれる。つまり、〈エミリ〉はヒースクリフという作中人物のなかで自らの半生を生きたとも言えるわけだ。ここから筆者が発見したのは、「ヒースクリフ＝エミリ・ブロンテ」説というさらなる新説の誕生である。フェルミがそこまで大胆な説を立てようとしたのか、それとも、あくまでも「ヒースクリフ＝ロバート」説の付け添えとして、後日談のなかに、『嵐が丘』的要素を存分に〈エミリ〉の日記のなかに投入しようとした結果、こうなったのかは、判断がつかない。しかし、『嵐が丘』のなかの “I am

Heathcliff”という台詞は、〈エミリ〉自身に置き換えると、“I am Robert”となるわけであるから、ロバートとヒースクリフと〈エミリ〉の間に一体感のようなものが存在していたとしても、まんざら飛躍があるとは言えないだろう。

一見強引ではあるものの、「ヒースクリフ＝エミリ」説は、魅力的な説である。というのも、「ヒースクリフ＝ウェルシュ／ジャック・シャープ／カッソン」という三つの悪人説では、孤立した遠い存在だったヒースクリフが、「ヒースクリフ＝ロバート」説によって、私たちにとってヒースクリフがよりシンパシーを抱ける対象へと近づいたわけだが、「ヒースクリフ＝エミリ」説を加えることによって、いっそうヒースクリフに対して強烈なシンパシーが生まれるからである。そして、伝説と小説の最も大きな違いは、やはり、私たちが物語中の人物に対してシンパシーをもつことが可能であるかどうかということにあるように思えるからだ。

本稿の狙いが、『嵐が丘』の起源を巡る諸伝説のなかでどれがいちばん正しいかを決することではないことは、改めて断っておく。それぞれの伝説は、互いに『嵐が丘』の起源であることを主張し合っているようだが、伝説はあくまでも伝説であって、小説の「真実」とは異なる。最後に取り上げたフェルミの新説がいちばん正しいとも言えない。フェルミの説もまた、伝説のうちのひとつであり、むしろ他の三つのヒースクリフ伝説を打ち消すというより相互補完的な役割を果たしていると言えるだろう。

重要なことは、『嵐が丘』という作品自体のなかに、「物語を生み出す力」が潜んでいて、逆にそこから無数の伝説や再話が生産され、増殖する力がある——『嵐が丘』とはそういう物語だということである。だからこそ、旧伝説の作者ライトは、自らの調査を「伝承」という形で——おそらくは空想をふくらませつつ——記録し、新伝説の作者フェルミは、日記という形で創作することへと、駆り立てられたのではないだろうか。さらには、映画などをはじめ、数多くの『嵐が丘』の翻案が生み出されてきたのも、再話を生産する、この作品の増殖力の表れだと言えるのではないかと思う。

そして、その伝説の中心にいるのはヒースクリフである。伝説から、作者の周辺の伝記に一步近づいてみると、しばしば指摘されるように、ヒースクリフのなかには、エミリが現実知っていた男性である、父パトリックや兄ブランウェルの面影が見られることも、付け加えることができる。

しかし、さらに一步推し進めて、以上に見てきたことを考え合わせると、誰よりもエミリ自身が、ヒースクリフのなかで生きていたと言えるのではないだろうか。孤立しがちで、協調性がなく、頑強で、決して人に譲らず、男のような性格の持ち主であったと言われるエミリ・ブロンテには、まさしくヒースクリフとの共通性が見られる。シャーロットが自分の詩をこっそり見たと知ったとき、エミリが烈火のごとく怒り、詩を出版しようという姉の説得になかなか応じようとしなかったというエピソードからもうかがわれるように、シャーロットがエミリの頑固な性格に手を焼き、妹を恐れさえていたことは、よく知られている。ブリュッセル留学時代にも、シャーロットが周囲に認められることを望んでいたのに対し、人からどう思われようと一切構おうとしないエミリは、姉にとっては「無意識の暴君」(Gaskell 231)のような存在だったと、ギャスケルは述べている。最期まで医者助けを拒んだエミリは、半ば「消極的な自殺」とも言えるその死に方において、ヒースクリフと似ていると指摘する批評家さえいる (Miller 172-74)。

『嵐が丘』の起源を探ることは、そもそも無謀な試みである。最初にも述べたとおり、作家自身の詩作品や他の作家から題材のヒントを得た可能性もあり、起源は決してひとつに絞れるものではないからだ。しかし、本論では敢えて、エミリが現実世界のなかから題材を得た可能性に焦点を当て、〈伝説〉という形をとったものに絞って考察した。そして、最後に行き着いたのは、作品の主要人物には、やはり作家自身の姿が投影されているという平凡な事実ではあった。しかし、その考察をとおして、『嵐が丘』が数多くの伝説から生まれた可能性をもつと同時に、それ自体、伝説・再話を生み出す再生力・増殖力を秘めた作品でもあることに、改めて光を当てることができたと言えるだろう。

参考文献

- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. London: Penguin, 2003.
- Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*. 3rd edition. California: New World Library, 2008.
- Chitham, Edward. *The Brontës' Irish Background*. New York: St. Martin's Press, 1986.
- . *The Birth of Wuthering Heights: Emily Brontë at Work*. London: Macmillan, 1998.
- Fermi, Sarah. *Emily's Journal*. Cambridge: Pegasus, 2006. [サラ・フェルミ 『エミリ・ブロンテの日記』 内田能嗣・清水伊津代・前田淑江監訳. 大阪教育図書, 2013]
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. 1857. rpt. Harmondsworth: Penguin, 1975.
- Gérin, Winifred. *Emily Brontë: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1971.
- Green, Dudley. *Patrick Brontë: Father of Genus*. 2008; rpt. Gloucestershire: 2010.
- Miller, Lucasta. *The Brontë Myth*. London: Vintage, 2001.
- Wright, William. *The Brontës in Ireland: Or, Facts Stranger Than Fiction* 1893)
- Yorkshire Tyne Tees. [Script] *The Brontë Connection*. [DVD: Films for the Humanities & Sciences, Films Media Group, 2008]
- ウラジミール・プロップ『昔話の形態学』北岡誠司他訳. 水声社, 1987.
- マックス・リュートイ『ヨーロッパの昔話 — その形式と本質』小澤俊夫訳. 岩崎美術社, 1969.
- .『昔話と伝説 — 物語文学の二つの基本形式』高木昌史他訳. 法政大学出版, 1995.
- .『民間伝承と創作文学 — 人間像・主題設定・形式努力』高木昌史訳, 法政出版, 2001.